

(1. レビュー論文)

「約束」の行方

——空間論的転回以降の社会学的想像力の在処——

C. W. ミルズ『社会学的想像力』
 (鈴木広訳、紀伊国屋書店、1959 = 1995)

稲津 秀樹

May his words haunt you, too. (Pamela Mills)

1 はじめに—社会学的想像力の「約束」を問いなおす

本稿は、C. W. ミルズによって主張された社会学的想像力 (Sociological Imagination) の「約束」をめぐって、空間論的転回ともよばれた諸批判の再考から新たな論点を提出するためのレビュー論文である。言うまでもなくレビュー (re-view) とは、字義通り対象に関する既存の見方を再考するために行われる学問的営為に他ならない。だがそもそも、今の時流に照らした際に社会学的想像力それ自体を問いなおす重要性がどこにあるのか。既に教科書レベルでの概念普及と理解がある古典のレビューには困難も伴う。とはいえ皮肉にも思想の一部分が定説／クリシェとなることで見失われた内容を掬いだし、時流に即した概念理解に改めるための探究も重要であると思われる。よって、本論を始めるにあたり、社会学的想像力を問いなおす意味と意義がどこにあるのかを明瞭にしておく必要があるだろう。

後述のように、冷戦下のイデオロギー対立に伴う戦争前夜とも呼べる危機的状況を背景に構想されたのが社会学的想像力の思考法であった。社会学的想像力は、まず個人 (生活史) と全体社会 (歴史) を関連させる思考法を可能にすることを科学的に「約束 (promise)」する。しかしその背景に、「敵」との出会いを通じたオルタナティブな社会像の提出を模索する意味で、政治的な思考法をも「約束」するものでもありえたことは余り知られていない。つまり、ミルズの知的職人としての営為からみた際の社会学的想像力とは、私たちにとっての「敵」(ひいては「戦争」状況) を生み出すイデオロギーと対峙する意味で、科学的のみならず、政治的な思考法をも「約束」するものであった (2.1)。だが、人間を囲い込む社会のあり方が流動化し、様々なイデオロギーの復権が指摘される状況下で、今日的な社会学的想像力の準拠先をいま・どこに求めることができるのか。つまり、現況のイデオロギーに対峙する社会的なものを想像する思考法の「約束」の行方が問われている (2.2)。こうした問題意識を持つ本稿が有する問いの範囲は広く、また、多くの問いを含みこむ。

よって本稿では、こうした「約束」の行方をめぐる問題提起と併せて、これを考察する上で

の嚆矢となる論点の提出に焦点を置きたい。その議論の足がかりは、社会学的想像力に投げかけられた人文地理思想からの一連の問題提起—後にポストモダン地理学からの空間論的転回 (spatial turn) とも呼ばれた諸批判—との出会いにあったと考える。後述するように、E. ソジヤや D. ハーヴェイらから提示された空間と社会をめぐる議論は、この「約束」への言及からも練り上げられたものだ。そこでは社会学的想像力に孕む「歴史主義」的側面に焦点があてられながら、独自の空間論が展開されていった (3.1)。だが、そこで批判されたように、はたしてミルズの議論において空間の位相は全く捉えられていなかったのだろうか。この批判に対し、本稿では『社会学的想像力』刊行前後のミルズの知的営為を考える上での原点となったと言われる彼の移民研究に着目する (3.2)。なかでも、ミルズの「移民のフィールド」への関心を掬い出すことで、社会学的想像力の「約束」履行をめぐる困難に対する一回答を提出する。以上の検討を通じて、空間論的転回以降の社会学的想像力をめぐる関連議論を理解する上での布石 = 在処を提示することを試みる (4)。

2 社会学的想像力の「約束」—その背景と現代的困難

2.1 「約束」の時代背景—未完の作品の意味

本稿で焦点を当てるのは、社会学における思考法としての社会学的想像力が「約束」していたことの内実とその行方である。周知のように、社会学的想像力とは、1950年代アメリカのラディカル社会学を代表する論者の一人とされたミルズによって主張された社会学的思考の方法を示す理論である。それは個人の生活史において看取される様々な「罠 (trap)」 (= 私的問題) に意識的となり、そこに全体の歴史 (= 公的問題) との関わりを見出す想像力こそが、「罠」を越える社会像の研究に寄与するというものだ。そしてその要諦は「約束 (promise)」という言葉と共に、次のように述べられる。

社会学的想像力は、歴史と生活史とを、また社会のなかでの両者の関係をも把握することを可能にする。それこそが社会学的想像力の務めであり、またそれが約束することでもある (Mills 1959 = 1995 : 7)¹⁾。

ここでミルズの述べる範囲と論点は多岐にわたる。同書に限っても社会科学の「約束」(第1章)にはじまり、T. パーソンズに代表される社会学の「誇大理論 (グランドセオリー)」の見直し (第2章)、P. ラザーズフェルドに代表される計量社会学の「抽象化された経験主義」への批判 (第3章)。「官僚制的な慣例やイデオロギー的な問題状況」(ibid : 110) が、社会科学に不可避となることの政治的問題と正面から向き合うことを説いた「さまざまな実用主義」(第4章)。これらを念頭に分析される「官僚のエートス」(第5章)と「科学哲学」(第6章)

1) 本稿に直接引用する文章は、原文も参考しつつ、適宜評者の方で訳出しなおした部分もある。

の在り様。その上で提示される「人間の多様性」（第7章）、「歴史の効用」（第8章）、「理性と自由」（第9章）の理解を通じ、最終的に「政治について」（第10章）と「知識職人」の在り方（補論）が論じられる。

ミルズは、このように社会科学の「約束」と「政治」のあいだに位置する諸問題（論点）に対して、社会学的想像力が果たすべき務め（task）を想定していた。だが彼の死後、遺族らが中心に編集したオートバイオグラフィを開けば、本書は元々「社会学的研究（“The Sociological Studies”）」として構想され、「約束」という言葉は、社会科学を扱った第1章のみならず、政治を扱った章題の「政治的約束（“On Political Promise”）」にも用いられるはずだった（Mills, and Pamela.eds. 2000: 230）。しかし、実際に『社会学的想像力』で「政治」が論じられたとき、それは街頭や議会での直接行動、あるいは危機的状況等への直接関与によって果たされる意味での政治的「約束」について述べられた訳ではなかった。あくまでも、彼は教育と研究に関わる範囲の「理性の官僚化や論争の官僚化の進行を回避する」という限定された意味での政治性を、社会科学の「約束」の下に論じたのだった（Mills 1959=1995: 251）。このようにミルズ自身は科学者であることに重きをおきつつも、その胸中には「その種の行動〔引用者注：上記の直接的な政治行動〕がしばしば賞賛すべきもので、私は自分でもそうしないではいられない気持ちになる場合もある」といった具合の揺らぎが見られたことも確かである（ibid: 251）。

こうしたミルズの「約束」をめぐる説明の背景には、科学と政治のあいだの緊張関係が深く影を落としている。これを考える上では、彼の知的経歴に即しながら本書の記されたタイミングを振り返ることが不可欠である。ミルズは周知のとおり、プラグマティズム思想の知識社会学的検討を行った博士論文をベースに、M. ウェーバーの合理化論、S. フロイトの精神分析、G. H. ミードの社会心理学、そして K. マルクスの階級論と T. ヴェブレンの有閑階級をめぐる議論を統合しつつ、彼独自の仕事を展開した。具体的には、戦後アメリカ社会における労働者組合の登場を扱った『新しい権力者』（1948）、新中間階級層を扱った『ホワイトカラー』（1951）、そして台頭する『パワーエリート』（1956）を著した、いわゆる大衆社会における階級像の諸相を分析した三部作を公表したことで知られている。

だが、その後ミルズが1962年3月に心臓発作で亡くなる前後にかけて、旧共産主義圏の国々—ヨーロッパ（ソビエト連邦）とラテンアメリカ（キューバ）を積極的に行き来しながら、冷戦状況下での次なる戦争状態を見据えた分析を行った『第3次世界大戦の諸原因』（1958）や、フィデル・カストロやチェ・ゲバラらに対して革命をめぐるインタビューを試みた『キューバの声』（1960）の出版を通じてアメリカ（自分たち）自身の変革や、それを通じたユートピア像の提出を模索した彼の姿に着目されることは少ない。

『社会学的想像力』が記されたのは、まさに階級三部作とこれらの書籍が刊行されるあいだの1957年から1959年にかけての時期であった。当時のソビエト連邦に代表される共産主義圏の動向を意識しながらデンマークのコペンハーゲンに滞在していたミルズは、遠く離れた資本主義圏のアメリカの状況を念頭に『社会学的想像力』を記していた。彼の書籍の中で「約束」

という際には、あくまでも社会学も含めた社会科学におけるその履行が念頭におかれていたことは繰り返すまでもない (Mills 1959=1995:24)。だが、その言葉が記された背景と、彼自身のその後の出版物の内容に鑑みたときには、原水爆をはじめ軍事開発に凌ぎを削る終わりの見えない科学競争に駆り立てられた冷戦状況下で、政治的な意味での「敵」と遭遇することによって引き起こされる世界戦争という「罨」の超克が目指されていたことが分かる (因みにキューバ危機が勃発するのは、ミルズが急逝してから僅か7カ月後の1962年10月のことである)。

加えてミルズ自身が、こうした想像力の源泉について考える際に、それが文学や芸術の領域から提供されていたことを述べている部分も見逃せない (ibid: 22-24)。実際、キューバ危機を目前にミルズが構想しながら未刊に終わった一作品として、『敵との接触 (“*Contacting the Enemy*”)』と題されるはずだった膨大な記録が残されている (Mills and Pamela. eds.2000: 331)。これはロシア語で“Tovarich (「仲間」や「同士」といった意)”という架空の人物に充てられた、ミルズからの手紙という文学形式をとった「敵 (国に住む人物)」と交わした書簡であり、前述のオートバイグラフィにも“Tovarich Letters”として収められているものだ。これらはユーゴスラビアのサラエボに滞在中の1956年から57年にかけての冬期から綴られはじめ、オーストリアのインスブルック、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ、そして帰米後のニューヨークをはじめ、まさに資本主義圏と共産主義圏のあいだをミルズ自身が越境的に移動する中で綴られた文学的な表現集でもある。特に上記書籍のインタビューのためのキューバ滞在后、1960年の春に『パワーエリート』のロシア語翻訳がなされたことを期に、ついにソビエトへ赴くタイミングで記された手紙に至る行などは、まさに彼自身の知的職人としての生活史の物語性を強く感じさせるものだ。

ここにその全てに言及することはできないが、彼のオートバイグラフィに遺された未完の作品を踏まえることが本稿の文脈において重要なのは、東西冷戦のイデオロギー対立という、第2次世界大戦後の政治的・経済的情勢を背景に展開された科学と政治をめぐる緊張関係の只中から、まさに社会学的想像力の論理が構想されていたという事実¹に他ならない。そして「約束」という言葉に込められた社会学的想像力の論理は、まさに本書刊行後のミルズ自身によって科学的のみならず政治的な意味でも履行されていくことになった。このように社会学的想像力の「約束」とは、病をおしつづつ諜報機関による監視のまなざしにも晒される中で、「敵」との具体的対話を求めて境界を越えていくミルズ自身の移動の過程から編み上げられた思考法に他ならなかったのである (Mills and Pamela. eds. 2000)。

2.2 「約束」履行の現代的困難—液状化する近代のなかで

このように社会学的想像力の「約束」の内実をテキストが記された経緯、そしてミルズ自身の生活史を踏まえた歴史の捉え直しから理解しなおすとき、日本語で記された範囲の近年の関連研究で扱われているトピックにも響き合う部分が見て取れる。例えばそれは、2001年アメリカ同時多発テロ (「9.11」) 以降の社会で、憎しみの連鎖を越えるための平和思想の動機の語彙—ひいてはアメリカの公共社会像—を考える上でミルズの議論を再評価する仕事 (伊奈

2013)であり、「日常生活圏での枠組みを離れ外部へ飛び出す」ツーリズム(高橋 2011:271)における社会学的想像力に着目した議論である。

実際、社会学的想像力の要諦の1つとして(「個人と社会」といった言説提示の仕方に代表される)二項対立的なカテゴリーの「間(あいだ)への注意を喚起」し、単一的で絶対的な「視点を変える」方法が含まれるといわれる(伊奈・中村 2011)。これを踏まえれば、憎しみに対する和平、日常生活に対する外部、といったこれらの研究によって提示された思考法の一例も、ミルズ自身が「怒りに満ちた、しかし多元性を増幅するようなメタファーを叩きつけ、一方の契機、一つの極を示すことで、公論を喚起し続けた」(伊奈 2013:267)ことに照らした際にも重要な議論を提起していることは間違いないだろう。

だが、「液状化する近代」(Bauman 2000=2001)とも呼ばれる時代状況にあつては、こうした二分法自体が問いに付されるようになる。それは冷戦が崩壊する前後の時代状況を扱った次の分析からも見てとれる。まず、冷戦崩壊後に科学が考察された際にも、近代的な二分法を元に生み出されるハイブリッドの増殖(Latour [1991] 1993=2008)が指摘されたことは記憶に新しい。これは言いかえれば、あらゆる関係性が(ミルズが注意喚起したような)「間」の内実から問いなおされていくことを意味する。次に政治に関わる考察でも、例えば「想像された共同体」(B. アンダーソン)論を踏まえた一連の考察のように、近代国民国家のモジュール形成を通じて人びとの歴史認識や空間認識がいかに構築されたものであるかが明らかにされてきた。こうした冷戦崩壊前後の科学と政治をめぐる分析に照らした際には、「アメリカ」という国民国家=全体社会の歴史のかつ文化的枠組みを措定し依拠すること、ひいては日常生活圏の「内」と「外」という二分法に基づいた異化の戦略を議論の「前提」とすることの限界も予想される。

それは端的に言えば、「社会」という語彙の提示それ自体が、前段の背景の下で今や根本的な問いに付されるようになったことと深く関連している。「社会的なもの(the social)」をめぐる批判的分析からも提起されてきたように、冷戦崩壊以降の日本においても「社会」を冠した政治が退潮していること。ひいては「社会」そのものの意味を主観的に理解し、想像することの困難があることが言われてきた(市野川 2006)。加えて、こうした変化の中で、ミルズが1950年代アメリカの状況を批判するために持ち出した「個人」と「社会」の間に亀裂を見るという問題化のための異化のコードが成り立つ条件自体が、上述の「社会の液状化」に加えて、「個人化の徹底」と「再帰性の高まり」という状況とともに、今や根底から大きく掘り崩されていることも指摘される(阿部 2012)。

このような時代の変化を念頭においた場合、社会学的想像力の「約束」を履行することの現代的困難が指摘される。だが、冷戦崩壊以降、私たちはイデオロギーによって作られる「敵」ひいては「戦争」から自由になれたのかと言われればそうではない。例えば、これも多くの論者によって指摘されてきたように、冷戦崩壊後に私たちが向き合うことになった新たなイデオロギーに、市場原理主義とも呼ばれるグローバリズムと、それと相対するように懐古的に持ち出される現代のナショナリズムとの相克状況が挙げられる(大澤・塩原・橋本・和田 2014)。

この現れ方がきわめて厄介なのは、上述の「9.11」を受け、まさに境界線の政治学として提起された議論を想起すればわかるように（杉田 2005）、そこでは「敵」／「味方」といった二項対立のかつ非対称性を伴う分断を再編し続けるポリティクスが、世界大のマクロな領域にとどまらず、身近でミクロな領域においても相互に影響を与え合いながら複雑に噴出し続けていることにある²⁾。

このように、かつてイデオロギーと呼ばれた政治的・経済的な主義主張に基づく社会の分断が、現在、新たなかたちで息を吹き返していることには少なくない研究者の同意が得られることと思われる。自戒も込めて言えば、この状況に対する批判が、例えば、新自由主義や新保守主義といった端的なイデオロギー批判の次元にとどまれば、社会学的想像力の「約束」履行の困難という問題の本質には届きにくいと思われる。しかし、その際の批判の準拠先として、ミルズの時代に想定された近代的な「個人」や「社会」の二項対立像を提示することにも、時代的・理論的な限界があることが今や指摘される。よって、全体（国家）の歴史と個人の生活史を結び付けるといふ、歴史の遠近法からもたらされる社会学的想像力の「約束」それ自体を理解し、履行することの困難がある。それにより私たちに様々な分断を仕掛けてくる現代的イデオロギーの「罨」と対峙し、それを乗り越えるための社会科学と政治を構想する上での批判的な議論の準拠先もまた不明瞭になっている。これこそが社会学的想像力の「約束」の現在をめぐる問題の所在に他ならない。

3 ミルズ社会学における空間の位相と移民研究

3.1 歴史的特殊性から空間的特殊性へ？－空間論からの／への問いかけ

上に述べてきたように、社会学的想像力の「約束」履行の困難とその行方を探るといふ大きな課題と対峙するにあたり、有効となりうる回答や方向性はひとつではない。なぜなら、ミルズが自身にとっての「約束」を論じる際にも述べていたように、当の想像力と「約束」をしなおすための方向性は、過去の社会科学の多様な「相異なる伝統」のなかに既に用意されているはずだからだ（Mills 1959 = 1995 : 24）。

その上で、「約束」の行方を考えなおす際に本稿が目指したいのは、『社会学的想像力』を刊行した後のミルズの議論に対して寄せられた人文地理思想からの諸批判である³⁾。そこでは個人の生活史と全体社会の歴史との関連づけが、社会学的想像力がもたらす「約束」であるとす

2) これは路上のヘイトスピーチが生じる背景に迫る際にも、東アジアの地政学的配置の分析を行う必要性が提起されていることとも関連するだろう（樋口 2014）。

3) 『社会学的想像力』刊行当時の書評内容を検討した訳者の鈴木広によれば、それらはミルズの「問題意識や主張の要点は承認しながら、論証や批判の方法、表現の技術などの性急さ・不器用・一面性」などへの指摘が中心であり、「主題である『社会学的想像力』と、それを研究のなかに生かすという主張については、ほとんど論及していない」状態であったという（鈴木 [1965] 1995 : 308-9）。本稿で人文地理思想の空間論に焦点を当てるのは、後に空間論的転回とも呼ばれた諸批判が、まさにミルズの社会学的想像力の議論それ自体を「研究のなかに生かす」ための足がかりとしていたからに他ならない。

る見解の「歴史主義」が批判されると同時に、社会空間と個人の生活空間との関連こそが問われるようになる。その有名なものに、E. ソジャによる『ポストモダン地理学－批判的社会理論における空間の位相』において展開された、社会学的想像力に対する批判がある。後述するD. ハーヴェイらと並んで、後に空間論的転回や新しい地理学とも呼ばれた一連の議論の「震源」のひとつともなったとされるこの書籍の中で（加藤 2004）、ソジャはポストモダンの複数の地理学（geographies）の理論背景の1つとして、ミルズの社会学的想像力を挙げ、そこから独自の空間論を展開しはじめている。

ソジャは批判的社会理論において、ミルズの述べた「歴史的想像力」が与える意味と意義を十分に評価しつつも－まさに上に紹介した「約束」の箇所を引くかたちで－それが「地理的ないしは空間的想像力を精力的に覆い隠し周辺化する、社会生活と社会理論の行き過ぎた歴史的コンテクスト化」に寄与してきた側面を批判する（Soja 1989=2003:17-21）。そして、M. フーコーの空間（ヘテロトピア）の議論や、H. ルフェーブの議論（生きられる空間）に代表されるフランス・マルクス主義の系譜を検討しつつ、「歴史」に対する「地理」を対置していく。それにより（特に）資本の運動に対する批判的社会理論の政治的・実践的言説の内に（「歴史」ではない）「空間の位相」を取り戻そうとする（ibid: 47-8, 53-7）。

このように言うのは、ソジャが自身の空間論を展開する上で、慎重に「再主張」という表現を用いているからである。ここにいわゆる空間論の立場からなされた批判が、政治的次元だけではない、科学的次元にも関わっていることの証左がある。それを考える上で踏まえておかなばならないのは、同書のロサンゼルスを舞台にした都市誌の位置づけである。同書の訳者の一人でもある加藤によれば、ソジャの都市誌の特徴は、都市形態の再編（外心都市）、生産地理の変容、グローバル化（世界都市の形成）、大都市の再分極化、要塞都市化、都市イメージの再編といった諸点を取り上げたことにある。それらはまさにロサンゼルスという都市の特殊性と、それに基づく学派の主張にも裏付けられているという（加藤 2004:174-5）。このようなロサンゼルス学派（LA 学派）の科学観の特徴は、社会学で都市を舞台にしたモノグラフを刊行してきたシカゴ学派の人間生態学と対比されながら⁴⁾、次のように示される。

知られるように、20世紀の初頭、急激な産業化の進展とともに、階級や階層、さらには言語や生活習慣さえも異にする膨大な数の（移民）労働者の流入によって大都市の相貌を露わにした新興都市シカゴに対して、パークをはじめとするシカゴ学派は、人間生態学の観点から、個人や集団の相互作用（競争と淘汰）を通じて節合＝分節される空間形態をモデル化した。それは移住者が適応すべく構造化されている自己完結的な領域である。こうした見方を「生態学的視点」と呼ぶとすれば、LA 学派のそれは、マクロな社会的文脈のなかで都市の位置を見定め、社会空間的な構造を探索する「政治経済学的視点」という

4) よく言われるように、人間生態学のいわば「実験室」として、大都市シカゴの移民流入をはじめとする都市の社会問題が扱われた。その際に重要だったのが、A. コントの実証主義哲学を踏まえた上で主張された、まさに「科学としての社会学」の視点であった（Park and Burgess [1921] 1924）。

ことになる……階級のみならずさまざまな社会的諸関係は空間的諸関係としてどのように構造化されるのか。そして階級、ジェンダー、人種／民族を分割する線を生産し強化する機制に焦点を当てるとき、明確に問いを構成する変数として浮かび上がるのは空間であった（加藤 2004: 178 強調引用者）。

このような LA 学派との科学観の対置について、シカゴ学派／人間生態学の側からの（再）批判も想定されるが、ここで強調したいのは、次の2点である。すなわち空間論的転回とも呼ばれた批判理論が焦点をあてようとしたのは、1) 上で言及された階級をはじめとする社会的カテゴリーが、歴史の位相における解放の政治学としてのみならず、ロサンゼルスのようにグローバル化する／軍事化する都市空間の位相においてみられる、境界線の政治学の問題として生起していること、2) かつ、この政治の問題は自然科学（生態学）を背景にした科学観ではなく、社会をめぐる政治経済学を背景とした科学観の下に認識され「再主張された空間」において問われることが可能になった、ということだ。

こうしてソジャは「社会的諸関係」と「空間的諸関係」のあいだの弁証法を主張するに至るが、これはミルズの言う社会学的想像力が「歴史的特殊性」（伊奈・中村 2007）を元にした思考から「約束」の論理を展開したのに対して、いわば「空間的特殊性」を基本に据えた社会をめぐる想像力が私たちに「約束」しうる内容として捉えうる。そしてその「約束」は、都市空間におけるマイノリティ／サブカルチャーの政治学を扱ってきたカルチュラル・スタディーズの思潮へと連なる社会学的な文化研究や、現代の科学技術の進展を背景に進む都市の軍事要塞化（特に監視社会化）が生み出す「内なる敵」との分断状況を扱った都市論、ひいては路上の民族誌の蓄積にも開かれていったことは言うまでもない。

こうした空間論からの問いかけにより、そこで言われる「敵」ひいては「戦争」の焦点は（歴史から空間へとその位相を）変化させながらも、政治的かつ科学的次元の両方を含めた「約束」履行の可能性は、潜在的に引き継がれてきたと言えるだろう。このように「歴史的特殊性」から「空間的特殊性」への転換点として、社会学的想像力と空間論的転回の諸批判との出会いの重要性を概括した上で、ここにあって次のような問いを投げかけてみたい。それはハーヴェイの次の主張に代表される意味でのミルズ批判が本当に妥当なものであったのかという素朴な疑問だ。

実はソジャによって精緻化された「歴史主義」批判が世に出る前に、若かりしハーヴェイもその思想形成の最中に、社会学的想像力への批判から独自の社会空間論を構想し始めていた。ソジャと同じく「約束」の箇所を引用した後、彼は個人と（歴史ではなく）空間・場所との関わりをめぐる意識ないし地理学的想像力があることを提案する（Harvey [1973] 2009: ch.1）。そうした想像力は、特に都市の建築家・芸術家・デザイナー・都市プランナー等に所有されているとして、ハーヴェイは次のように述べる。

「空間的意識」または「地理学的想像力」……を、この「社会学的想像力」と対比する

ことは有益である……強力な社会学的想像力を持っているが、空間のない世界で生活し活動しているように思われる多くの人びとがいる（とくにライト・ミルズ）。他方で、強力な地理的想像力ないし空間的意識をもってはいるが、空間の形成される方法が社会的過程に深い影響を与えることを理解できない人びとがいる—したがって、現代の生活環境には、美的であるが住む事の出来ない設計の例が無数にある（Harvey [1973] 2009: 24）。

この内容自体、彼のその後の知的遍歴を想起した際にはとても興味深いものだ。だが、ここで批判対象として名指しされた「ライト・ミルズ」にとっての社会（ひいては都市）観は、はたしてハーヴェイに「空間のない世界（spaceless world）」とまで看破される程度の位置づけだったのだろうか。これは「歴史主義」批判の対象となった社会学的想像力（「約束」の箇所）だけではなく、ミルズの知的職人としての生活史や、彼の議論全体に敷衍してまで、空間の不在を問題提起することが妥当かどうかを問うていると筆者には考えられる。

3.2 「移民のフィールド」の意味—移民研究者としてのミルズ

この問いを考えるために、まずミルズのオートバイグラフィを開いてみよう。するとそこには、空間（space）ないし場所（place）の概念は、危機の時代を捉える歴史との関わりで念頭におかれていたことが見て取れる。特に場所概念については、「私たちの帰属感覚（our sense of belonging）」を考える上で、あくまでも歴史の中において捉えられた感覚的な対象として理解されている⁵⁾。このことから、彼は決して「空間のない世界」を生きながら考えていたわけではなく、歴史と空間の位相は、（前者への強調はあるものの）互いに結びつけられながら理解されていたと考えられる。

だがその内容は、どのような具体的な対象と現場のリアリティをもって考えられていたのだろうか。それを念頭においた上で、次に『社会学的想像力』以外の著作、ここでは階級三部作の完結前にテキサスからウィスコンシンを経てニューヨークへと出てきた彼が、プエルトリコ出身者の移住について大規模な共同調査を行った『プエルトリカン・ジャーニー』（1950）を開いてみたい。すると、そこには次のように（1つの国家・1つの都市に留まらない意味でまさしく）空間の位相を、具体的な場所とともに明確に記述しようとしていたミルズがいたことを私たちは知ることになる。

法律上、プエルトリコ人はアメリカ人である。しかし、スペイン系の遺産を受け継いだ農村的な島とアメリカの大都市との対照は、心理的文化的にプエルトリコ人を都市の外国人に押しやって来た。プエルトリコ人が移住してきた国は伝統的に移民の国であった……

5) 「私たちは帰属意識を失っているのか？」と題された“Tovarich”宛ての小論中で、1950年代中頃の支配的ムードについて論じた際に、彼は「場所」と「歴史」との関連を次のように記している。「私たちが危機的メンタリティを有していることは確かだろう……その精神は十分な歴史感覚とその中の私たちの場所感覚（sense of history and of our place in history）に根差しているのだ」（Mills and Pamela. eds. 2000: 184）。

ニューヨークは移民たちにより建設された都市である。ニューヨークの街やスラムにはこれまで何度も外国からの移民たちで満ち溢れてきた。1940年においてもニューヨークの人口の4分の1以上は外国生まれであり、またそれ以上の人口が外国人を両親とする子どもたちであった。貧困なイーストサイドはロシア人やポーランド系ユダヤ人の世界になっており、三番街の東側、サットン・プレイス (Sutton Place) からハーレム (Harlem) まではイタリア人、パワリーからモット・ストリート (Mott Street) にかけては中国人の世界になっている (Mills et al. 1950=1991: 72 強調引用者)。

既存研究でも言われるように、ここにはまずもってアメリカという国、ひいてはニューヨークという都市のハイブリッド性を記述していたミルズがいたことが指摘できる (伊奈 2013: 166-7, 262) 同書でミルズたちは「移民たちの都市」(第5章)としてのニューヨークや「プエルトリコ人の世界」(第6章)を、移民の中での男女ごとでの意識の差異と共に捉えようとしていた。調査票による量的調査と、インタビューに基づく質的記述から浮かび上がってくる彼・彼女たちの生活は、ミルズがその後展開した階級論における「最下層」を構成する人びとからみた都市論としても位置づけられるものでもある (奥田ほか 1991; 堀田 2002: ch.6)。よって、ハーヴェイにみられるミルズ自身と彼の社会学全体に対する批判は、いささか誇張されたミルズ像に対する性急な批判であったと捉えられるべきだろう。

だがむしろ、ここでより積極的に考えるべきは、歴史と空間という二つの位相を意識しながら、移民という対象をミルズが捉えようとしていたという事実が、社会学的想像力の「約束」履行の困難に対して持つ意味である。移民の生活世界にとっての時間、つまり歴史の位相に限っても、それは既に特定の国民から見た時の歴史ではない。例えば、同書第1章では、移民たちの出身地であるプエルトリコ島の政治的・経済的状況が統計資料等に基づきながら、その歴史的経緯と共に記述されている。同島の歴史は、アメリカとの関係において決して対等でなく、スペインの占領を経て、アメリカへの編入に伴う社会構造上の経済的・軍事的従属状態にあった。これを指して、ミルズたちはその島の状況を「植民地としてのプエルトリコ」として分析している (Mills et al. 1950=1991: 13)。

これに加えて、上に引用した島嶼部と大都市のあいだの空間記述を思い出すとき、ここにはプエルトリコ島とニューヨークの比較説明が行われているという解釈以上の示唆があると思われる。それは、移民の生活世界に沿った見方を明らかにすることが—移民当事者の世界観が、特定の国民の立場から見た時の歴史と空間に収まりきらない意味で—分析者の観点を時間的かつ空間的にも押し拡げることには他ならない。この意味で、ミルズの移民研究における概念化以前の社会学的想像力の内実には、後の「歴史主義」批判をも越えていく示唆があると考えられる。それは第1に、彼は同書が有する関心領域として「移民のフィールド」(ibid: iii)⁶⁾という

6) 訳書には「移住の領域」への「関心」(fields of interests that of migration…)とあるが、これを本稿では「移民のフィールド」への「関心」と訳出した。これをはじめ同書が他にも関心を向けるフィールド (fields) として「少数者集団の諸関係」と「ラテンアメリカの文化」が挙げられている。その

位相を提示しつつ、人種的・民族的経験についてジェンダーをはじめ、その内的差異と共に考察していたこと。第2に、ひいてはその考察が、一国内・一都市内に留まらない歴史的かつ空間的な位相での分析軸を有していたことである。

第一の示唆についていえば、今日、彼の『社会学的想像力』が振り返られる際にも、実はこの仕事意識されることは少ない。むしろ彼自身の社会学的想像力は人種やエスニシティ、ひいては性やジェンダーといった諸点に殆ど適用されず、それらは今日への課題だとする指摘さえある (Gitlin 2000:239)。確かに、この調査は『社会学的想像力』はおろか階級三部作が完結する以前の、それも共同研究の成果である。その意味では、社会学的想像力の「約束」を直接的に履行したものではない。とはいえ、このときの調査体験がミルズをして、上記の『キューバの声』のみならず (奥田ほか 1991; 伊奈 2013:167)、後の「新左翼」論や『共産主義者たち』(1962)への関心を介しつつ、本稿で紹介した晩年の『敵との接触』の議論へ向かわせたとも言われる (Horowitz 1963=1971)。このような学説史上の解釈を踏まえるならば、彼の移民研究に、後の『社会学的想像力』を構想し実践する上での重要な萌芽が隠されていると見て取ることは筆者の過大な解釈でもないように思われる。

これを第二の示唆にも関連させれば、「移民のフィールド」という位相を描き出す上で、特定の範域に縛られない時空間を捉えようとしていたミルズの議論を提示することは、上述の空間論からの批判内容に照らしても重要な意味があると考えられる。なぜなら、空間論的転回からの「歴史主義」批判を移民研究者としてのミルズから再考することではじめて、私たちの前に移民の立場から見た時の歴史(植民史)のみならず、彼・彼女たちの移住過程でつくられる空間や場所の感覚をも(その過程で交わりあう多様な社会的差異と共に)捉えようとしていたミルズが浮かび上がってくるからに他ならない。

こうした「移民のフィールド」の位相に着目することの重要性は、液状化する社会の中で困難に直面すると言われる社会学的想像力の「約束」を考えなおす意味でも、強調してもしすぎることはない。なぜなら、ミルズたちが明らかにしようとした「移民のフィールド」は、今日時点から解釈した際にも、まさしく「間」それ自体に内在した領域を(同じ移動に関わりながらも「日常」と「外部」が区別されたツーリストとは異なる意味で)示しているからである。だが、その時空間が成り立つ背景に着目したときには大きな「罨」が潜んでいることも確かだ。それは同書が対象とするプエルトリコ移民が(第1次大戦と第2次大戦の)戦間期にニューヨークに多く移り住んだことや (Mills et al. 1950=1991:22)、当時の米議会や大統領選挙への政治参加上の劣位的な権利状態からも説明される (ibid:14)。つまり、「移民のフィールド」に着目した歴史、ひいては空間の理解は、戦争という暴力や政治的立場に関わる差別的処遇を背景にしながら捉えられていたのである。

このように、後に『社会学的想像力』の「約束」が構想される背景となる論点は、彼の移民

ㄨ 上で、移民問題の再考に留まらず、混血人種 (mixed race) の物語や、北米・南米文化圏の接触 (contact) 状況を明らかにする意味と意義が強調される (ibid: iii)。本稿ではこれらの関心を別々のものとして理解せず、「移民のフィールド」への関心と結びついた一連の問題領域として捉えている。

論の中にもその萌芽を見てとることができる。そこから提出された「移民のフィールド」という位相には、歴史と空間が共に含まれつつ、今の問題状況への示唆も与えている意味で、社会学的想像力を扱った現在の議論を理解する上での重要な布石＝在処となりうる可能性がある。以上を踏まえ、社会学的想像力の「約束」とその行方を考察するにあたり、本稿で提示したミルズ理解、ひいては「移民のフィールド」の位相に照らした際の関連研究を示しつつ、今後の課題を素描する。それにより本考察のまとめにかえたい。

4 まとめにかえて—社会学的想像力の「約束」の行方

このレビュー論文では、ミルズの知的職人としての歩みに即しつつ、主に空間論的転回とも呼ばれた諸批判との出会いから社会学的想像力の「約束」の行方を再考してきた。それにより、私たちは移民研究者としてのミルズが提示していた「移民のフィールド」の位相を社会学的想像力の準拠先として、今一度理解することの重要性へと辿りついた。最後に関連研究に照らしながら、この準拠先を採求する上での課題を記しておきたい。

既に述べたように、社会学的想像力が「約束」する科学性とは、第一に個人の生活史と全体社会の歴史を関連させていくことにある。だが、それはミルズにとって、東西冷戦のイデオロギー対立を背景につくられる「敵」と出会うことによって、自分たち自身を批判的に捉えなおす社会像を提示するための政治的な意味での「約束」でもあった(2.1)。これは既にアメリカ公共社会の動機の語彙としてのミルズ思想が論じられている通りでもある。だが、東西冷戦の終結後、液状化するようになったとされる社会に、グローバリズムやナショナリズムといったイデオロギーの復権が言われて久しい。そして人間関係の「間」の内実をめぐってせめぎ合う境界線の政治学が様々な現場に噴出する状況で、個人と社会といった二項対立的な公論喚起の仕方、そのものの理論的困難が今や指摘される(2.2)。

このような「約束」履行の現代的困難を考える上では、様々な回答が予想される。その中で本稿が着目したのは、社会学的想像力への代表的な批判の一つで、後に空間論的転回と呼ばれた人文地理思想の空間論との出会いであった。そこでは、ミルズが社会学的想像力の「約束」の議論は、社会と空間の関係に着目することの意味と意義を不可視化させる「歴史主義」と批判された(3.1)。だが、『敵との接触』を目指した晩年のミルズの知的職人としての営為の原点の一つともいえる共同研究に立ち返った時に、彼自身によって生きられていた(概念化以前の)社会学的想像力には、歴史のみならず、空間の位相を描き出す観点が確実に含まれていた。かつその前提として、彼が戦争や差別と無縁ではない理解で「移民のフィールド」を捉えようとしていたことを指摘した(3.2)。筆者はここに、復権する今日のイデオロギーが生み出す「敵」、ひいては「戦争」といった「罨」と対峙する上での、一つの重要な準拠先があると考え(逆に言えば「移民のフィールド」では、これらの事象と否応なしに対峙させられることを意味する)。実際、この準拠先と関連する議論が、ミルズの影響を受けた今日の理論的／経験的な仕事にも確実に引き継がれている。

上述のように、ミルズはプエルトリコ移民たちの出身地（島）のことを、アメリカとの関わりの中で生まれた植民地の時空間として捉えていた。この点は、社会学における国民国家の歴史理解、ひいては現在について考える際に、ポストコロニアリズム（植民地主義後）の問題認識を踏まえる必要性を説いた K. バンプラの考察とも結びつく。彼女の仕事では植民地時代から連なり合う複数の歴史性（connected histories）を近代理解、ひいては社会学的想像力に節合して批判的に問いなおす歴史理解が主張される（Bhambra 2007=2013）。

そしてもう一人、20世紀の世界大戦前後のニューヨークを歩いていたミルズに対して、21世紀の対テロ戦争前後に、イギリス・ロンドン近郊の超多様性地域、つまり移民・難民の集住地域をフィールドワークしている社会学者に L. バックがいる。彼は『耳を傾ける技術』という仕事を通じて－多様な背景を有する人びとが通う病院で日々起きていること、空から（飛行機の格納庫から）転落死していく亡命者たちのこと、そして地上で起こるテロ事件とその被害者、ひいては「近所のバス停」（路上）で起きていることを取り上げ－グローバル化の中で埋もれていく数々の（声なき）声を聞き取り、描きだすことに社会学的想像力の議論を積極的に用いていく。とくに彼は階層分極化された都市空間の中で、多様な出自を持つ若者たちによって生み出される「ホーム」の帰属感覚を民族誌的に描くことで、対テロ戦争の掛け声の下－「ホームグロウンテロ」とも呼ばれた出来事での「内なる敵」へのまなざしに対し－グローバルズムでもナショナリズムでもない、別様の社会像を提出することを試みている（Back 2007=2014）。

このように社会学的想像力の「約束」の行方／在処は、ミルズのいう「移民のフィールド」の位相を準拠先の一つとしつつ、再編された現代のイデオロギーが生み出す「罨」を批判的に問い続ける現在の知的営みに見出すことができる。本稿に言及した範囲に限っても残された課題は多いが、ここでは次の二つの指摘を行っておきたい。一つは、ミルズが「約束」と言った際に想定されていた科学と政治に対する緊張関係に「移民のフィールド」の考察からどこまで迫れるのかということだ。上に紹介したように、政治的な意味での「敵」や「戦争」との対峙は、特にバックの研究において取り組まれていることでもある。だが、とりわけ「9.11」以降の対テロ戦争の時代におけるリスクとしての「敵」を、移民、ひいては移動する者たちの中から算出・監視する科学技術の次元への批判はどのように考えられるのか（Lyon 2003=2004）。もう一つは、生（者）と死（者）との関係である。同じくバックはグローバル化の暴力を基調にした暗い時代の日常を行き交う多様な出自を持つ人びとの生（それは死に裏打ちされた生である）を聞き取る社会学、ひいては想像力の重要性を「生の社会学」として提起する（Back 2007=2014）。このように多文化的な背景を有する者たちの「生」の議論における「死」の側面－いわば死者が生者の社会を動かしていく側面（Gordon [1997] 2008）－に、「移民のフィールド」から立ち上げられる社会学的想像力はどのように応答していくことができるのだろうか。つまり、社会学的想像力の「約束」の行方は、生者にとっての科学的・政治的次元のみならず、今や生と死の岸辺においても問われはじめている。とすれば、死者となった者たちとの「約束」をどのように履行していくのかという問いかけが、（移民の存在も含めた）私たちの社

会的想像力に突きつけられていると言えるだろう。本稿は、これらの課題に向きあう上でのささやかな問題提起（ディスカッション・ペーパー）に過ぎない。

【参考文献】

- 阿部潔, 2012, 「社会学的想像力の現在－監視研究における『抵抗』の位置づけを手がかりに」『関西学院大学社会学部紀要』114: 91-105.
- Back, Les, 2007, *The Art of Listening*, London: Berg, (=2014, 有元健訳『耳を傾ける技術』せりか書房).
- Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ－液化化する社会』大月書店).
- Bhabra, Gurinder, K., 2007, *Rethinking Modernity: Postcolonialism and the Sociological Imagination*, New York: Palgrave Macmillan. (=2013, 金友子訳『社会学的想像力の再検討－連なり合う歴史記述のために』岩波書店).
- Gitlin, Todd, 2000, “Afterword”, Mills, Charles. W., [1959] 2000, *The Sociological Imagination: Fortieth Anniversary Edition*, Oxford University Press: 229-242.
- Gordon, Avery. F., [1997] 2008, *Ghostly Matters: Haunting and the Sociological Imagination*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Harvey, David, [1973] 2009, *Social Justice and the City: Revised Edition*, Georgia: The University of Georgia Press.
- 樋口直人, 2014, 『日本型排外主義－在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会.
- Horowitz, Irving, 1963, “The Unfinished Writings of C. Wright Mills: The Last Phase.” *Studies on the Left*, 3 (4): 3-23. (=1971, 「C. W. ミルズの未完の書－最後の局面」青井和夫・本間庸平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 476-499.)
- 堀田泉, 2002, 『モダニティにおける都市と市民』御茶ノ水書房.
- 市野川容孝, 2006, 『社会』岩波書店.
- 伊奈正人, 2013, 『C. W. ミルズとアメリカ公共社会－動機の語彙論と平和思想』彩流社.
- 伊奈正人・中村好孝, 2007, 『社会学的想像力のために－歴史的特殊性の視点から』世界思想社.
- ・———, 2011, 「武器としての想像力－C. W. ミルズ『社会学的想像力』」井上俊・伊藤公雄編, 『社会学的思考』世界思想社, 167-176.
- 加藤政洋, 2004, 「エドワード・ソジャとポストモダンの転回」『都市文化研究』3: 166-181.
- Latour, Bruno, [1991] 1993, *We have never been modern*, Harvard University Press. (=2008, 川村久美子訳『虚構の「近代」－科学人類学は警告する』新評論).
- Lyon, David, 2003, *Surveillance after September 11*, Oxford: Blackwell. (=2004, 田島泰彦監修・清水知子訳, 『9・11以後の監視－〈監視社会〉と〈自由〉』明石書店).
- Mills, Charles. W., 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press. (=1995, 鈴木広訳『社会学的想像力(新装版)』紀伊国屋書店).
- , ——, —, Clarence Senior, and Rose Kohn Goldsen, 1950, *The Puerto Rican Journey: New York's Newest Migrants*, New York: Russell and Russel. (=1991, 奥田憲明・吉原直樹・堀田泉訳『プエルトリカン・ジャーニー』恒星社厚生閣).
- Mills, Kathryn. and Pamela Mills. eds. 2000, *C. Wright Mills: Letters and Autobiographical Writings*, Berkeley: University of California Press.
- 奥田憲明・吉原直樹・堀田泉, 1991, 「訳者あとがき」C. W. ミルズ・C. シニア・R. K. ゴールドセン『プエルトリカン・ジャーニー』恒星社厚生閣, 215-219.
- 大澤真幸・塩原良和・橋本努・和田伸一郎, 2014, 『ナショナリズムとグローバリズム－越境と愛国のパ

- ラドックス』新曜社.
- Park, Robert, E. and Ernest, W. Burgess, [1921] 1924, *Introduction to the Science of Sociology*, Chicago : University of Chicago Press.
- Soja, Edward, W., 1989, *Postmodern Geographies : The Reassertion of Space in Critical Social Theory* : Verso.
 (=2003, 加藤政洋・西部均・水内俊雄・長尾謙吉・大城直樹訳『ポストモダン地理学-批判的社会理論における空間の位相』青土社).
- 杉田敦, 2005, 『境界線の政治学』岩波書店.
- 鈴木広, [1965] 1995 「解説」 C. W. ミルズ『社会学的想像力』紀伊国屋書店, 301-314.
- 高橋薫, 2011, 「社会学的想像力の今日的意義に関する考察-ひとつの可能性としてのツーリズム」『21世紀社会デザイン研究』10 : 265-274.